



TITLE:

# 西漢後半期の政治と春秋學：『左氏春秋』と『公羊春秋』の對立と展開

AUTHOR(S):

富谷, 至

---

CITATION:

富谷, 至. 西漢後半期の政治と春秋學：『左氏春秋』と『公羊春秋』の對立と展開. 東洋史研究 1978, 36(4): 570-605

ISSUE DATE:

1978-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153682>

RIGHT:

# 西漢後半期の政治と春秋學

——『左氏春秋』と『公羊春秋』の對立と展開——

富 谷 至

## 序 章

### 第一章 左氏學の擡頭

### 第二章 『公羊傳』と『左氏傳』

#### 一 行爲の評價

#### 二 法律とその施行

#### 三 國家と君臣

#### 四 漢代公羊學と『左氏傳』

## 第三章 西漢後半期の政治と春秋學

### 一 宣帝の卽位

### 二 皇帝權の變容

### 三 吏 治

### 結 語

## 序 章

儒學は西漢武帝期に官學化され、以後思想界に於いて、儒學一尊の風潮が漸次支配的となった。儒學五經のうち春秋は、『春秋公羊傳』（以後、『公羊傳』と略稱）が學官に設置され、西漢の春秋學は、春秋公羊學であつた。後世、春秋學の中の地位を占める『春秋左氏傳』（『左傳』と略稱）は、西漢期末だ勢力を有せず、『左傳』が初めて脚光を浴びるのは、西漢最末期、劉歆による左氏學學官樹立の提言に端を發し、それ以後左氏學が擡頭してきたとするのが通説であり、同時に『左傳』が偽書であるとの説もかかる經緯に由來する。

しかし、左氏學は既に、宣帝以後の西漢後半期に於いて擡頭し始めていたのではないだろうか。そしてそこには、公羊學の地位の相對化と低落も認められると言えないだろうか。内野熊一郎氏によれば、今文・古文の對峙は既に戰國期にその源流があり、秦に至りて官學派（今文）と私學派（古文）の二派に分立し、漢代に踏襲されたと言ふことである。<sup>②</sup>東漢期に活發化する今文・古文の對立の内、春秋學では今文⇨公羊學、古文⇨左氏學なる關係が成立することは周知の通りである。

ところが西漢哀帝期に出された劉歆の『左傳』を中心とした古文學を推獎する提案の裏には、宣帝期以降から續いていた公羊學と左氏學の對立が存し、提案はその表面化に過ぎず、いわば一つの轉換點でもあったのではないかと考えられるのである。そこで、かかる對立、公羊學の相對化と左氏學の擡頭を西漢後半期の政治史の流れと關連させて検討することによって、兩學盛衰の經緯と意義を明らかにしていきたい。

## 第一章 左氏學の擡頭

『左傳』の學官樹立が唱えられたのは、西漢哀帝期、劉歆の提案を最初とする。哀帝は、五經博士をして劉歆と論議せしめようとしたが、博士の反對から學官樹立は反古にされる。かかる背景に劉歆の「移書讓太常博士」なる書が提出されるが、<sup>③</sup>この書は哀帝期に至るまでの儒學の有様、とりわけ『左傳』の状態を知る上で大きな示唆を與える。長文に亘るが重要な箇所なので次にそれを引用しよう。

至孝武皇帝、然後鄒、魯、梁、趙頗有詩・禮・春秋先師、皆起於建元之間。（中略）及魯恭王壞孔子宅、欲以爲宮、而得古文於壞壁之中、逸禮有三十九・書十六篇。天漢之後、孔安國獻之、遭巫蠱倉卒之難、未及施行。及春秋左氏丘明所修、皆古文舊書、多者二十餘通、臧於祕府、伏而未發。孝成皇帝閱學殘文缺、稍離其眞、及陳發祕藏、校理舊文、得此三事、以考學官所傳、經或脫簡、傳或間編。傳問民間、則有魯國桓公、趙國貫公、膠東庸生之遺學與此同、抑而

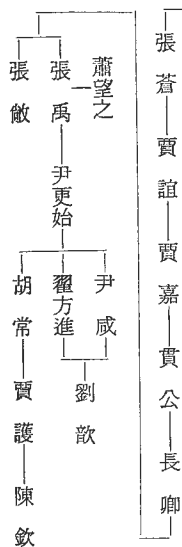
未施。(中略)往者綴學之士不思廢絕之闕、苟因陋就寡、分文析字、煩言碎辭。(中略)猶欲保殘守缺、挾恐見破之私

意、而無從善服義之公心、或懷妬嫉、不考情實、雷同相從、隨聲是非、抑此三學、以尙書爲備、謂左氏爲不傳春秋、

……『漢書』楚元王傳)

以下、劉歆は哀帝期になり『左傳』の學官樹立の建議が學者の強い反對で反古にされたことに言及し、『左傳』を中心とした古文書を強く推奨するのである。ところで、劉歆の右の書は、武帝期以後の『左傳』が二種の流れをもつことを示している。その一は宮中祕府に藏されたもの、一は民間に傳授され、在野の學者の間で傳わっていたものであり、成帝期それが合流されたのである。又劉歆は、哀帝期に至るまで『左傳』が如何に抑壓されてきたかを述べている。『左傳』の學官樹立を目論む彼の發言には、若干の誇張が含まれているかも知れぬが、劉歆に至るまで『左傳』は冷遇されていたと推測してもよい。そして西漢末期にかけて冷遇はより強く、抑壓へと變化した。「左氏爲不傳春秋」とする『左傳』に向けての非難、劉歆のかかる行動による諸儒の怨恨の甚だしきは共にそれを物語る。しかし、見方を變ずれば、この抑壓の強さは『左傳』の地位の向上を意味し、劉歆によるかかる運動もこの様な風潮の上に立つものと考えられるのである。我々はここで「移書讓太常博士」を離れ、他の史料からそれを考察することにしよう。

『左傳』の來歴、傳授を傳えるものは、『別錄』、『漢書』儒林傳(以下、『漢書』を擧げる場合、『漢書』を省く)、『經典釋文』序録に見られ、それらをまとめると上表の如き系統がわかる。上表に於ける左丘明より張蒼に至る傳授は、『別錄』に見られるもので、『經典釋文』序録はこれを踏襲している。



漢に至つての『左傳』の傳授は、張蒼を最初とするが、『史記』によると彼が秦時より圖書に關する職に居り、天下の圖書に明るかつたとあり、『說文解字』序は、『左傳』が漢初

に張蒼により獻上されたと記載する。<sup>9)</sup>これより、『左傳』と張蒼の結びつきを肯定的に確認できることは勿論、先述の宮中祕府の『左傳』が張蒼より獻上されたものであるとの想像が可能となるのである。

張蒼以下、賈誼・賈嘉・貫公と續く『左傳』の傳授は、民間に於けるものを示し、その中心となったものは貫公に代表される河間獻王下の古文學の學團であらう。儒林傳には、貫公が河間獻王下の博士であったことが見え、景十三王傳は、河間獻王の下で天下の書が集められ、『毛氏詩』・『左氏春秋』など後世、古文學の書となるものに關して博士が置かれたことを記す。しかし、賈嘉・貫公・長卿と續くこれら景帝から武帝にかけての人物は、あくまで在野の一儒生であったと思われ、彼らに關する傳も、儒林傳にしか見えない。それに比し、張敞以下、劉歆へと續く『左傳』傳授に關係した人々は、宣帝期、京兆尹となった張敞、御史大夫・丞相の役職に就いた蕭望之・翟方進、元帝期に諫大夫となり宗廟整理問題に關與する尹更始など、要職に就き中央で活躍した者である。このことは、左氏學が在野の學であつたにしろ、その地位が向上してきたことを示すと解釋してもよいであらう。

次に、表〔一〕に列舉した以外の人物の上奏文等に『左傳』に關する記載が見え、しかもそれが武帝期以前ではなく昭帝・宣帝以降に見られることも、西漢末期にかけての左氏學擡頭を示していると考えられる。第一に指摘したいのは、昭帝期の眭弘による上奏文である。

元鳳三年正月、大石が自立し、昌邑の枯木が再立するなどの異變が起る。これは、民間から天子となる者があることを示すと考えた眭弘は、「春秋之意」を推して次の如く述べる。

先師董仲舒有言、雖有繼體守文之君、不害聖人之受命。漢家堯後、有傳國之運。漢帝宜誰差天下、求索賢人、禮以帝位、而退自封百里、如殷周二王後、以承順天命。（眭弘傳）

昭帝が禪讓という形で帝位を賢人に讓るべきことを意見し、民間出身の宣帝の出現を暗示したものであるが、今注目したいのは、上奏文中に見える「漢家堯後説」である。何故ならば、漢Ⅱ劉氏が堯の後であると根據づける經典は『左傳』

を置いて他にないのである。東漢の初期、賈逵は既にこれを明言し、<sup>⑨</sup>狩野直禎氏は、『左傳』文公十三年の記事等からこれを詳細に考證している。<sup>⑩</sup>上奏文中でも公言している如く、眭弘は董仲舒の弟子で公羊學者ではあるが、彼が同じ『春秋』の傳である『左傳』も兼習し、「春秋之意」を推して述べたこの上奏文に左氏説が挿入されたと考えられる可能性は十分にあると言えよう。<sup>⑪</sup>

第二に取り挙げたいのは、路溫舒である。宣帝期、鉅鹿で春秋學を學び郡吏となった路溫舒の上奏文に、

臣聞烏鳶之卵不毀、而後鳳凰集。誹謗之罪不誅、而後良言進。故古人有言、山藪藏疾、川澤納汙、瑾瑜匿惡、國君含詬。(路溫舒傳)

とあるが、ここに見える「山藪藏疾……國君含詬」は、『左傳』宣公十五年の伯宗の言葉と同文なのである。<sup>⑫</sup>劉師培は、このことから路溫舒も『左傳』を學んだとする。路溫舒が春秋學を學んだ鉅鹿は、左氏學派の盛んな河間地方に近く、路溫舒の春秋學は『左傳』の影響を少なからず受けていたと考えられ、私も劉師培の説に肯首したい。以上、宣帝期以降、『左傳』が公羊學者に『公羊傳』と共に兼習され、その形跡が上奏文中に見られることを示し、左氏學擡頭の一つの證左としたのであるが、左氏學擡頭と共に宣帝期以降、公羊學の地位が變化したことを次に述べておこう。

西漢初期から「春秋公羊而已」(儒林傳贊)とある如く、公羊學は春秋學の筆頭であり、第一の地位を西漢を通して保持したことに異論はない。『漢書』に見える「春秋之義」の大部分が『公羊傳』の傳義をふまえ、「春秋」とは『公羊傳』を示す場合が多いことなどは、西漢の春秋學が春秋公羊學であったことを保證する。しかし、絶對的であった公羊學の地位は宣帝期以降、若干低落し相對化したと考えられる。その契機となったのが宣帝による甘露三年の穀梁學官樹立であり、儒林傳はその後の穀梁學の盛行を述べている。<sup>⑬</sup>事實、宣帝期以後、「春秋」・「春秋之義」が『穀梁傳』を示すものがある。二・三の例を挙げよう。

元帝期、戦いに敗れた匈奴の郅支單于らを晒首にするか否かの議論があった。『月令』の記載を盾に反對する匡衡に

對し、許嘉・王商らは次の如く意見する。

春秋、夾谷之會、優施笑君、孔子誅之。方盛夏、首足異門而出。宜縣十日乃埋之。（陳湯傳）

右例の「春秋」は時代ともとれるが、『月令』との對比の上でやはり經書を示すと考えたい。然らば、夾谷之會での孔子のかかる處置を記載しているのは『穀梁傳』を置いて他にはない。<sup>⑧</sup> また翟方進の上奏文に、

春秋之義、尊上公謂之宰、海內無不統焉。（翟方進傳）

とあるが、この場合も『穀梁傳』僖公九年の傳文を踏まえたものであろう。さらに、成帝期『穀梁春秋』を學び郡文學になった梅福が、三統を建て孔子の子孫を封すべきことを上奏した文に、

今成湯不祀、殷人亡後、陛下繼嗣久微、殆爲此也。春秋經曰、宋殺其大夫。穀梁傳曰、其不稱名姓、以其在祖位、尊之也。此言孔子故殷後也、雖不正統、封其子孫以爲殷後、禮亦宜之。何者、諸侯奪宗、聖庶奪適。傳曰、賢者子孫宜有土。而況聖人、又殷之後哉。（梅福傳）

とある。ここで注目したいのは、『春秋』の傳として『穀梁傳』が前面に推し出されていることである。何故ならば、後にただ「傳曰賢者子孫宜有土」とあるのは他ならぬ『公羊傳』昭公三十一年の傳文なのである。一般に「春秋」「春秋之義」として提示されてきた『公羊傳』がここでは單に「傳曰」として擧げられ、『穀梁傳』が明言されているのと好對稱をとっているのは、梅福に於ける『公羊傳』の地位の低下であり、上奏文という公式の場でそれが通用していると言える。以上の三例は、公羊學の地位の相對化を示すものとして理解したい。<sup>⑨</sup>

ところで張敞以下、劉歆に至る西漢後半期の『左傳』傳授に關わる人々には共通する特徴を認めることができる。特徴の第一は、劉師培の指摘にある如く、左氏學を學んだ者のうち穀梁學にも通じていた者が多いことである。儒林傳の『穀梁春秋』の條を見ると、蕭望之・尹更始・尹咸・翟方進・胡常らは、穀梁學の傳授者でもある。

第二の特徴は、左傳家の中には法律に精通し能吏と稱された人が多いことが擧げられる。張敞は膠東相、京兆尹を歷任

し賞罰主義で以て宣帝より多大の評價をうけた。班固は彼の業績を次の如く記す。

（張）敞爲人敏疾、賞罰分明、見惡輒取、時時越法縱舍、有足大者。（中略）然敞本治春秋、以經術自輔、其政頗雜儒雅、往往表賢顯善、不醇用誅罰、以此能自全、竟免於刑戮。（張敞傳）

また翟方進を評して班固は、

（翟）方進知能有餘、兼通文法吏事、以儒雅緣飭法律、號爲通明相。（翟方進傳）

と述べる。さらに路溫舒に關しても、

路溫舒字長君、鉅鹿東里人也。（中略）求爲獄小吏、因學律令、轉爲獄吏、縣中疑事皆問焉。太守行縣、見而異之、

署決曹吏。又受春秋、通大義。（路溫舒傳）

と、法律に精通していたことが知られる。つまり、路溫舒・翟方進・張敞らはすべて法律に通じ、それを「儒雅」で以て補っていたことが認められるのである。共通するかかる特徴を如何に考えるべきかに留意しつつ、以下左氏學擡頭の原因を西漢後半期の政治史の上から検討していきたいが、その前にまず、『公羊傳』と『左傳』の思想上の對峙という、より哲學的分野に足を踏み入れることにしよう。

## 第二章 『公羊傳』と『左氏傳』

『左傳』と『公羊傳』『穀梁傳』を朱子は、史學と經學に區別したことは周知の如きであるが、史學と稱された『左傳』は實際、事實の記述を中心として傳を展開する。山田琢氏は「春秋三傳の比較研究」に於いて、事が義の從屬的地位しか認められない『公羊傳』に對し、『左傳』では如何なる場合も事を無視して義が語られることはなく、その「書曰」の解釋も、事を中心になされていると述べる。

かく事を中心として傳を展開する『左傳』に於いて、左傳的世界に登場する人物の行動を『左傳』自身が下す評價



も、事に基づいてなされているのではないだろうか。人間の行動の評価を通して見られる兩傳の相異點を考えていこう。

## 一 行爲の評價

〔Ⅰ〕 晉里克弑其君卓子、及其大夫荀息。（僖公十年・經）

晉獻公は世子申生を殺し、嫡子奚齊を立てる。奚齊の母驪姫への寵愛が爲せる行爲であつた。臨終の際、獻公は奚齊の付け人荀息を呼び奚齊のことを頼み、荀息はその保護を誓う。しかし公の死後、申生の付け人里克は、奚齊及びその子卓子を殺害し、恵公を擁立したのである。里克に従うべく要請された荀息は獻公との約束を盾に拒絶し、その結果、討死する。

事件の経緯は兩傳とも右に示したのとほぼ同様の話を掲げるが、『公羊傳』は、

及者何、累也。弑君多矣、舍此無累者乎。曰有、孔父仇牧皆累也。舍孔父仇牧無累者乎。曰有。有則此何以書。賢也。何賢乎荀息。荀息可謂不食其言矣。

と傳を展開し、獻公との約束に終始した荀息の行爲を「賢」として讚美するのである。

一方、僖公九年の傳文にこの逸話を載せる『左傳』は、これとニュアンスを異にする。

君子曰、詩所謂白圭之玷、尚可磨也。斯言之玷、不可爲也。荀息有焉。

「斯言之玷」とは、荀息が獻公に奚齊の保護を誓った言葉であり、愚君の行爲に殉じた荀息の不用意な言動、愚直に冷淡な評價を下す。

〔Ⅱ〕 多十有一月己巳朔、宋人及楚人戰于泓。宋師敗績。（僖公二十二年・經）

泓に於ける宋と楚の戦いである。多勢の楚に對し、宋は無勢。楚の布陣が整わない間隙を縫っての急襲戦法を進言する臣下（『左傳』では司馬子魚）に對し、卑怯な行動はできないとする襄公は聞く耳を持たない。結果、宋は大敗を喫する。

後世「宋襄の仁」と稱される話であり、兩傳とも傳で詳述している。しかし、宋襄公の評價には大きな相異を見る。

君子大其不鼓不成列、臨大事而不忘大禮。有君而無臣。以爲雖文王之戰、亦不過此也。

と『公羊傳』は襄公の行爲を絶賛し、加えて臣下の不徳を非難するのである。何休注に至っては、敗戦の原因は臣下にあるとまで述べる。<sup>④</sup>

しかし、『左傳』は司馬子魚の言を假りて、かかる襄公の行爲を非とする。

君未知戰、勅敵之人、隘而不列、天贊我也。阻而鼓之、不亦可乎、猶有懼焉。且今之勅者、皆吾敵也。雖及胡苟、獲則取之、何有於二毛。明恥教戰、求殺敵也。傷未及死、如何勿重。若愛重傷、則如勿傷。愛其二毛、則如服焉。三軍以利用也、金鼓以聲氣也。利而用之、阻隘可也。聲盛致志、鼓儻可也。

「きれいごとだけでは戦争に勝てない」とする『左傳』のこの考えは、『公羊傳』のそれとあまりに對照的であると言わねばならない。

〔Ⅲ〕 秋七月叔弓如宋、葬宋共姬。（襄公三十年・經）

襄公三十年五月、宋に火災があり、その折、宋共王の夫人伯姬が焼死した。侍女と行動を共にせねばならないという禮規定があり、その故に逃げ遅れたのである。伯姬の死についての兩傳の論評は次の如くである。

外夫人不書葬、此何以書。隱之也。何隱爾。宋災、伯姬卒焉。其稱諡何。賢也。（『公羊傳』）

君子謂宋共姬、女而不婦、女侍人、婦義事也。（『左傳』）

即ち、『公羊傳』にあつては、伯姬が禮を遵守しその故に焼死した行爲を「賢」として稱え、貞婦の鏡となす。さらに『公羊傳』が述べる伯姬に關する言辭は、この條に止まらず同年の澶淵の會の目的が『春秋』經文に明記されているのは、他ならぬ伯姬の死を諸侯が悼んだからであるとする。<sup>⑤</sup>『公羊傳』が伯姬に寄す愛惜は、かくも深い。

一方、『左傳』が「君子曰」として與えた評價は誠に厳しいものである。「未婚の女子の行爲なら理解もしようが、既

婚の婦人の行動とは思えぬ。婦人ともなれば事の宜しきに従って行動すべきだ」とし、讃辭を惜まぬ『公羊傳』に比し、聊かの評價も與えない。

かく、『Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』に見られる兩傳の人物評價の相異は、兩傳が異なる評價基準を持っているからであらう。『Ⅰ』に於ける荀息の忠誠、『Ⅱ』に見られる宋襄公の潔癖、『Ⅲ』に現れた伯姬の敬虔、『公羊傳』はそれらを「賢」とし、君子の行動として絶讃する。いったい『公羊傳』に於いて、「賢」とは最高の讃辭であり「賢」なる評價を得る一つは、勇・信・義を基本要素とする俠の觀念である。『Ⅰ』の『公羊傳』傳文に「孔父仇牧皆累也」とある孔父・仇牧の故事は、桓公二年、莊公十二年の傳文中で言及され、スタイルは荀息の場合と同じ。孔父・仇牧・荀息は全て、その俠氣の故に「賢」と稱される。同様に『Ⅱ』『Ⅲ』の例も、「信」に代表される任俠的行動であると考えられる。さらに『公羊傳』は、行為者の意志を徹底して重視する。傳文中の「如其意」（桓公元年）「成公意」（隱公元年、二年・五年）「致其意」（傳公二十八年・襄公七年）などの表現、「將而必誅」（莊公三十二年・昭公元年）とする筆誅は、その心情重視の立場を示し、『公羊傳』の世界に於いて、善き意志を持っているにも拘らず、現實に中斷された行為を成就させ、惡しき意志は、現實的になる以前に貶絶を加えるのである。例『Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』で一般的には愚直と見られる任俠的行為を絶讃するのは、『公羊傳』が保持するこの様な即情判斷に基づき、又その情を容認するからに他ならない。『公羊傳』では、行為の結果は二義的なものである。しかるに『左傳』は、人間の行為の過程に見られる心情を重視しない。『公羊傳』が讚美する任俠的行為に對し誠に冷淡であり、重視は事Ⅱ行為の結果に、より多く傾斜する。『Ⅲ』で述べる「義事Ⅱ」事の宜をはかりて行ふの立場は、『Ⅰ』『Ⅱ』に見られる愚直なる行為に對する冷淡、任俠的行為の輕視に繋がり、『左傳』がもつ評價基準と言えよう。つまり『左傳』は行為を事に即して客觀的に評價するのであり、かかる即事評價は『公羊傳』に對して現實的であり、又一種、合理的であると言えよう。では、かかる『左傳』の立場は具體的にはどの様な形で現れ、『公羊傳』と如何に對峙するのであらうか。

## 二 法律とその施行

前節で検討した如く、『左傳』は行爲の評価を、事の結果に従って判斷するが、さらに進んで『左傳』は、人間の行爲が準據すべき「事」をも重視する。準據すべき「事」とは法律・刑法であり、行爲の即事評價は法重視に結びつく。例を擧げて検討しよう。

### 〔Ⅳ〕 晉趙盾弑其君夷獐。（宣公二年・經）

暴君晉靈公が殺害された事件である。殺害の張本人は趙穿であり趙盾ではない。經文で「趙盾弑其君」とあるのは、太史董狐がそう書いたからで、所謂「董狐の筆」として史官の模範を示す有名な條である。事の經過は兩傳（『公羊傳』は、宣公六年の條）ともに詳しい。靈公を戒めんとした趙盾の殺害を公は目論むが失敗に終る。趙盾逃亡の後、趙穿が靈公を殺した。歸國した趙盾は、賊を討伐しなかったが故に君主殺害の罪を蒙る。

心情を重視し、復讐を積極的に肯定する『公羊傳』が深い同情を寄せつつも、かかる趙盾の行爲を是認しないのは當然であろう。

爾爲仁爲義、人弑爾君而復國不討賊、此罪弑君而何。

との史官の言辭は、行爲の即情評價に立ち、刑罰の判斷基準を行爲者の心情に求める『公羊傳』の思想の代辯である。君主殺害の賊は當然討つべきなのに、その放棄は心情に於ける君主殺害を意味するとの考えであろう。しかし『左傳』の史官の言葉は、聊か異なる。

子爲正卿、亡不越竟、反不討賊、非子而誰。

と「亡不越竟」の四字を挿み、孔子の言葉を借りて次の如くに評す。

董狐古之良史也。書法不隱。趙宣子古之良大夫也。爲法受惡。惜也、越竟乃免。

即ち、「越竟」という事實の如何で、趙盾の罪の有無を判斷する。これは『左傳』の即事評價を示すものであると同時に、「書法不隱」「爲法受惡」と「法」を中心にして展開された孔子の議論には留意したい。董狐と趙盾は、法遵守から評價される。法を遵守したが故に兩名は禮讃され、法の下に命を落した趙盾に愛惜と同情を寄せるのである。『左傳』の法重視の考えが明確に示されていると言えよう。

〔V〕 宋華元帥師、及鄭公子歸生帥師戰于大棘。（宣公二年・經）

『左傳』はこの宋と鄭との戦いの際の逸話として次の様な話を載せる。

井戸に落ちた鄭の武將を助けた宋の狂狡は、逆にその武將の捕虜となつてしまった。

先例〔Ⅱ〕の宋襄公の行爲に一脈通ずるこの話に關し、『左傳』は同様の評價を與える。

君子曰、失禮違命、宜其爲禽也。戎昭果毅以聽之、之謂禮。殺敵爲果、致果爲毅。易之、戮也。

「禮」とは、ここでは「軍法」を意味する。<sup>②</sup>軍法の遵守を第一とし、人の苦境につけ込まない（宋襄公の仁）には、一片の評價も與えない。

以上、〔Ⅳ〕〔Ⅴ〕に即して『左傳』の法重視を述べてきたが、このことは傳文中しばしば言及され、『左傳』が重要視する「禮」が〔Ⅴ〕に於いてもわかる様に、刑・法律と區別されず使用されている場合があること、<sup>③</sup>又『左傳』が決して否定的に扱わない覇者の原理が、刑徳二元主義に立脚していることなどからも立證できよう。では『左傳』のかかる法重視は、どのような特徴を具有していたのであろうか。

『春秋左氏傳』には、春秋期活躍した幾多の英雄、賢人が登場する。『春秋』の傳である『左傳』が多分に小説的色彩を帯びるのも、これら登場人物が織り成す多様性にあるとも言える。中でもとりわけ有名で『左傳』の高い評價を得ているのは、賢相と稱された齊晏子、鄭子産であろう。子産に關しては、『左傳』は隨所でその言動に對する讃辭を與える。<sup>④</sup>そしてこの子産の言動の中に刑罰重視、賞罰主義の肯定が窺えるのである。特に次に擧げる逸話には注目したい。

〔Ⅴ〕三月鄭人鑄刑書、叔向使詒子產書曰、始吾有虞於子、今則已矣。昔先王議事以制、不爲刑辟、懼民之有爭心也。猶不可禁禦。是故閑之以義、糾之以政、行之以禮、守之以信、奉之以仁。(中略)今吾子相鄭國作封洫、立謗政、制參辟、鑄刑書、將以靖民、不亦難乎。(中略)復書曰、若吾子之言、僞不才、不能及子孫、吾以救世也。既不承命、敢忘大惠。(昭公六年・『左傳』)

鼎に刑書を鑄た子產の行爲を叔向が非難する。非難は德治主義の立場からのものであるが、子產はこれを一蹴する。救世の爲には刑法に基づく政治もやむを得ないと。ここで注目したいのは、刑書を鼎に鑄た行爲であり、それは刑法の成文化を意味する。行爲の即情評價を特徴とする『公羊傳』では、「春秋之義」が刑罰の判斷基準となるが、それは不文法的規範、とも言うべきものであらう。後述の如く、漢代では刑罰は「春秋之義」を中心として判斷される。しかし、この條に於いて『左傳』は成文法的刑法を是認するのである。この昭公六年の條に對し『左傳』は後日談を用意している。

鄭駟黻殺鄧析而用其竹刑。君子謂、子然於是不忠、苟有可以加國家者、弃其邪可也。(中略)故用其道、不弃其人。詩云蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇。思其人、猶愛其樹、況用其道、而不恤其人乎。子然無以勸能矣。

子產が作した刑書の不備を補う爲、竹簡に刑書を書いた鄧析が殺された原因は、君命に依らず刑書を私造したからとする杜預注と、他に罪がありその爲に死罪となったとする孔穎達疏があるが、今そのどちらに従うかは問題ではない。問題としたいのは、鄧析の行爲を國家に益あるものとし、刑書の作成を『左傳』が是認していることであり、刑法の成文化にここでも肯定的だと言える。

次に法重視の立場に立つ『左傳』がそこから、法の厳格な適用、厳格な賞罰主義への志向を特徴とすることが指摘できる。〔Ⅳ〕を始めとして傳文中の各所にそれが示されているが、今、特に刮目すべき例を一つ挙げよう。

〔Ⅵ〕晉の邢侯と雍子の間の土地争いに判決を下した叔魚は、雍子からの賂で邢侯を有罪とする。怒った邢侯は二人を殺してしまった。叔魚の兄であり名臣の譽高い叔向は、三人を共に有罪とし、叔魚と雍子の尸を市に晒し、邢侯に死

罪を宣告した。(昭公十四年・『左傳』)

『左傳』は、孔子の言葉を借りて叔向のかかる行動を絶讃する。

仲尼曰、叔向古之遺直也。治國制刑、不隱於親。三數叔魚之惡、不爲末減、曰義也夫、可謂直矣。(中略) 邢侯之獄、言其貪也、以正刑書、晉不爲頗。三言而除三惡、加三利、殺親益榮、猶義也夫。

他の二人と區別することなく、自分の弟をも刑罰に據した行爲を「直」として稱えるこの言葉は、同時に「直」に関する『論語』の、

葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾黨之直者、異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。(子路篇)

なる有名な條を想起せしめる。この『論語』の條は、家族間の愛情が法的權威を凌駕することを示し、『公羊傳』さらには董仲舒の主張は、この延長線上に位置する。しかし『左傳』のこの逸話は異なる。「治國制刑」「以正刑書」を是とし、法律の嚴格な施行を讚美し、施行は近親、他人を問わず平等に行なわれるところに「直」があるとする。肉親の愛情より法律の忠實なる施行が優先することをこの話は示す。以上、『左傳』の法重視を中心に検討してきたが、次節では、この即事評價が別の一面で『公羊傳』の立場と抵觸することを示そう。

### 三 國家と君臣

先述の如く、『公羊傳』は事を義の從屬的地位に置くのであるが、この場合の義とは言うまでもなく「春秋之義」であり、『公羊傳』は哀公十四年の傳文で

制春秋之義、以俟後聖、以君子之爲、亦有樂乎此也。

と結びその傳を終える。「春秋之義」の具體的表現は、「大夫無遂事」(桓公八年・莊公十九年・僖公三十年・襄公二年、十二年)

「不與諸侯專封也」（僖公元年、二年、十四年・襄公元年・昭公四年、十三年）などの主張であり、強烈な理念重視、原則主義に立つ『公羊傳』は、各所でこの「春秋之義」を顯彰する。尤も、日原利國氏が指摘されるように、傳文中の「實與而文不與」（僖公元年、二年、十四年・文公十四年・宣公十一年・定公元年）などの表現、即ち文實二元論にあつては、倫理性の上に立ち「實、與す」に、より比重をかけるのであるが、「文・實の論」を敢て提起せねばならなかったことは、『公羊傳』の理念主義の強さを物語るものであらう。この場合の理念、原則とは、「撥亂世、反諸正」（哀公十四年）と述べられた、社會の安定と秩序の爲のものであったことは論を俟たない。そして、社會の安定と秩序を望み『公羊傳』がその原則主義を強く主張するものの一つは、王位繼承の順位の遵守であつた。

『春秋』の十二公は隱公から始まるが『公羊傳』は、隱公即位が經文に明記されていないのは、王位繼承の順位を遵守し自分より身分の高い桓公に讓位しようとした隱公の意志を成就せしめんが爲と解する（『公羊傳』隱公元年）。隱公の計劃は中斷されるが『公羊傳』は隱公元年～十一年にかけて、五回にわたり「成公意」と、隱公の善き意志を顯彰する。そして王位繼承の禮規定を、隱公元年春正月の條で、

立適以長、不以賢。立子以貴、不以長。

と明言する。又、『公羊傳』が「何賢乎某、讓國也」と傳をたて、「賢」と讓國を禮讚するのは、賢者を國君にせんとする先君に對し、賢者が辭退し正當な王位繼承を遂行した行爲を善としたからであらう。これに對し、王位繼承の屈折（それが賢者に對してであれ）に於ける『公羊傳』の非難は強い。二・三の例を挙げよう。

〔Ⅷ〕 癸未葬宋繆公。（隱公二年・經）

宋宣公は、その子與夷を寵愛していたが、王位は才能ある弟繆公に讓る。繆公は自分の後を先君宣公の恩に報いる意味で與夷に繼がす。後、與夷は繆公の子莊公馮に殺された。

『公羊傳』は、宋の王位繼承の經緯を右の如く述べ、最後に、



故君子大居正。宋之禍、宣公爲之也。

と結び、宣公のかかる行爲を非難する。「大居正」とは、徐彥疏に従えば、

大其適子居正、不勞違禮而讓庶。

であり、「宋之禍」とは桓公二年の

宋督弑其君與夷、及其大夫孔父。（桓公二年・經）

なる政變である。後日のこの政變が果して莊公馮が督と共謀して爲したか否かは定かでないが、『公羊傳』は、王位繼承の屈折を認めないのである。

〔Ⅸ〕 秋七月癸巳公子牙卒。（莊公三十二年・經）

魯莊公には、慶父・叔牙・季友の三兄弟がおり、子般は莊公の世子である。叔牙に慶父擁立を婉曲に示された莊公は、季友に子般のことを頼み國政を委ねる。公の死後、叔牙の反亂を察知した季友は、叔牙に毒をすすめ、

公子從吾言而飲此、則必可以無爲天子戮笑、必有後乎魯國。不從吾言而不飲此、則必爲天下戮笑、必無後乎魯國。と叔牙を自殺に追いやるのである。

右の如くに傳を展開する『公羊傳』は、叔牙のかかる行爲を「君親無將、將而誅焉」なる「春秋之義」を以て裁下する。そして經文の「公子牙卒」との表現は、季友の爲に諱みただとし「惡を遏め」、王位繼承の屈折を防いだ季友の行爲を讚美する。

事の真相、果して叔牙に反亂の意志があったか否かは定かでないが、『公羊傳』のこの話には若干の意圖的作爲が感じられなくもない。『左傳』もこの事件について觸れるが、叔牙謀叛についての記事はなく、叔牙に死を逼った時の季子の言葉は、

飲此則有後於魯國、不然死且無後。（莊公三十二年・『左傳』）

とあり、「最期は潔くなされい」との意を持つ『公羊傳』のそれとはニュアンスがある。<sup>④</sup>また司馬遷も魯世家で、兩傳を折衷してこの事件を記すが、牙の謀叛について記述はなく、季子の牙に對する言葉は、『左傳』のそれと同じい。王位繼承に於ける『公羊傳』の強い原則主義が、季友への禮讓と叔牙に對する貶絶を作為せしめたのではないだろうか。

一方、『左傳』は王位繼承について、柔軟な判斷を下す。例〔Ⅸ〕に於ける叔牙への評價が『公羊傳』ほど厳しくないのは、『左傳』のかかる姿勢を示すものであろうし、〔Ⅷ〕での宣公の態度を、

君子曰、宋宣公可謂知人矣。立穆公、其子饗之、命以義夫。（隱公三年・『左傳』）

と、『公羊傳』とは逆に讚美しているのである。又、『左傳』では原則に拘らず多數の是認で以て即位した王を是ともし、能力主義から王位に即くことにも積極的評價を與えている。<sup>⑤</sup>そしてかかる『左傳』の姿勢は、第一節で述べた即事評價が内包する合理的、現實的思考の具體的現れと考えられるのである。以上、王位繼承に關する兩傳の立場の相異を検討したが、次にこれを君臣關係から考えていこう。

心情重視の立場をとる『公羊傳』に於いて、その心情とは、任俠の氣風であることは既に述べた。『春秋公羊傳』が志向する君臣關係は、この君主と家臣の心情的結合、任俠的結合の要素を多分に含む。例〔Ⅰ〕の荀息、それと同じスタイルで桓公二年・莊公十二年の傳に見える孔父・仇牧らは、任俠的行爲から君主と命を共にし、又それ故「賢」と稱されたが、そこに現れた君臣關係は、君と臣のパーソナルな結合であり、『公羊傳』はかかる君臣關係を讚美する。例〔Ⅳ〕で趙盾の行爲を是認できないのも、『公羊傳』が志向する君臣關係に反するからである。心情的結合を主とする君主關係に於いて、君主が殺された場合、心情的に、何らかの行動をとるべきであり、そこには「越竟」などという法規定は問題外となることは當然である。

『公羊傳』に比し、『左傳』は心情的結合についてより淡泊な態度をとる。例〔Ⅰ〕、例〔Ⅳ〕で見られた『左傳』の即事評價はそれを物語るが、今新たに、『左傳の世界』の賢人が、殺害された君主を前にして述べた言葉を挙げよう。

〔X〕夏五月乙亥、齊崔杼弑其君光。（襄公二十五年・經）

〔XI〕夏四月、吳弑其君僚。（昭公二十七年・經）

一つは、〔X〕の齊國のお家騒動である。齊君の死を聞いて駆け付けた賢相晏子と、その供者の會話は次の如きものであった。

其人曰死乎。曰獨吾君也乎哉、吾死也。曰行乎。曰吾罪也乎哉、吾亡也。（襄公二十五年・『左傳』）

そして、晏子は最後に次の様に言う。

君民者、豈以陵民、社稷是主。臣君者、豈爲口實、社稷是養。故君爲社稷死、則死之、爲社稷亡、則亡之。若爲己死而爲己亡、非其私暱、誰敢任之。且人有君而弑之、吾焉得死之、而焉得亡之。

晏子のこの態度を、『左傳』は吳季札にもとらせる。〔XI〕の吳闔廬の君主殺害事件である。

（季札曰）苟先君無廢祀、民人無廢主、社稷有奉、國家無傾、乃吾君也。吾誰敢怨。哀死事生、以待天命。非我生亂、立者從之、先人之道也。（昭公二十七年・『左傳』）

共通する、晏子と季子の態度の中には、君臣の心情的結合は希薄であり、態度はより現實的、合理的である。現實とは國家安定の現實であり、その爲に合理的に結合した君臣關係と言える。即ち評價をその特徴とする『左傳』の現實的、合理的思考を端的に表す。

#### 四 漢代公羊學と『左傳』

公羊學は、漢代に至り董仲舒を中心として新たな展開を呈する。その最も注目すべきものは災異説の出現であろう。〈天〉の觀念すら見出せない『公羊傳』にあつては、天と人との相關から導き出される災異説は存在しなかったのである。<sup>⑤</sup>董仲舒の思想については従来多くの研究がなされているが、とりわけ重澤俊郎氏「董仲舒研究」<sup>⑥</sup>は秀れて示唆に富

む。以下、董仲舒の災異説につき、重澤氏のこの著作をもとに若干述べておこう。

董仲舒は、自然の異常現象の大小を異と災に分け、それぞれ天譴、天威とする（『春秋繁露』必仁且智）。國家の失政に對し災異という手段で譴告を發する（同、必仁且智）天は、瑞祥を下し同意を示す場合もあり、これを「受命之符」と言う（董仲舒傳）。この災異説の前提としては、人間の中に小宇宙を投影し、そこに人と天の相關を認める天人相關の觀念が存し（『春秋繁露』人副天數）、天と人とは陰陽を原理として感應し合う（同、人副天數）。天人相關の觀念から出發しそこに陰陽、さらには五行説を付加し、天人感應を説き構成されたこの災異説は、君主權抑制の爲に用意されたのであるが、直接的には天と君主の相關を説くことより、神性を帯びた天と同様、君主も神性を保持することを要する（同、離合根）。故に董仲舒に於ける君主は神祕的存在であり、「君主の作爲に神祕的な呪術の能動性がある」と考えることができる。董仲舒の災異説は、かく神祕的色彩を多分に内包するものであったが、董仲舒以後、災異説は豫言的なものへと變化し超人間傾向はより濃厚となる。第一章で觸れた、昭帝元鳳年間の自然現象から宣帝即位を豫言した眭弘を始め、夏侯勝・京房・翼奉・李尋ら、『漢書』はこれら豫言説を説く學者の傳を卷七五に記載する。

自然現象と人事の有機的連關を主張し、神祕的色彩を内包する漢代公羊學につき、先學の研究を基にして概觀したが、次に本節の主目的である『左傳』との比較、『左傳』に於ける人事と自然現象について考えたい。ここでも『左傳』の代表的賢人子産の言動を挙げよう。

〔Ⅹ〕 昭公十七年、彗星が大辰に發生した。この現象に關し、宋・衛・陳・鄭の諸國での火災を豫言する者がいた。鄭では神竈が子産にかかる天變に對し處置をとるべく提案した。天災に對し禳禱は無意味とする子産は耳を貸さない。果して明年、鄭に火災が起る。神竈らの非難に對し、子産は敢然と言うに、

天道遠、人道邇。非所及也。何以知之、竈焉知天道、是亦多言、豈不或信。（昭公十八年・『左傳』）

天道（自然現象）と人道（人事）に距離を置き、天道を人知の及ぶ所ではないとするこの子産の言葉は、神祕的豫言、祭

祀を小説的に多分に含む『左傳』にあつては、特殊なものに見えるかも知れない。しかし、天と人とを合一のものとせず、人間を視點の中心に置き、全ての祭祀は人間を中心として行なわれるとの思考は、『左傳』の隨所に散見する。

夫民神之主也。是以聖王先成民、後致力於神。（桓公六年）

祭祀以爲人也、民神之主也。（僖公十九年）

民之所欲、天必從之。（昭公元年）

かかる人間中心の思考、視點が人間に置かれているということは、人事をより身近なものとして重視する子産の態度に繋がるものといえる。さらに人事が現實である以上、現實重視の思考をもつものであらう。『左傳』のもつ即事評價が内包する現實重視、合理的思考が自然現象と人事の關係に於いても現れているのである。

以上、本章では『左傳』と『公羊傳』の思想を即事評價と即情評價に區別し、その對峙をいくつかの側面から考えてみた。かかる相違をもつ兩傳が、實は西漢後半期の政治と深く關りを持つと云うことである。左氏學擡頭は、『左傳』の具有する上述の特徴と當時の政治の趨勢から考えねばならない。視點は歴史の流れの上に移る。

### 第三章 西漢後半期の政治と春秋學

宣帝以降、左氏學の地位が公羊學の相對化と共に漸次向上し始めるといふことは第一章で指摘した。かかる現象は當時の政治的風潮が大きく關與しているのであるが、宣帝期以降、如何なる變化が政治史上に起こつたのであらうか。まず最初に擧げねばならないのは宣帝即位にかけての混亂である。

#### 一 宣帝の即位

武帝には後の昭帝を含め六人の子があつた。本來、長子の戾太子が皇位を繼承すべきであつたが、巫蠱の亂で冤罪に死

し、齊王、昌邑王は早世し、燕王、廣陵王は不肖の子であるが爲、末子弗陵（昭帝）に皇位が譲られる。その折、霍光が大司馬大將軍となり、内朝を基盤に政權を掌握する。昭帝即位で一段落が着いたと思えた皇位繼承は、昭帝夭折により再び混亂を呈す。王子の無い昭帝の後嗣は行動に缺陷のある廣陵王よりも、昌邑王髡の子賀が適任とされた。そこには、霍光の意見が與ること大であったことは言うまでもないが、霍光の行爲の理論的裏付けとなった郎官の言葉、

周太王廢太伯立王季、文王舍伯邑考立武王。唯在所宜、雖廢長立少可也。廣陵王不可以承宗廟。（霍光傳）

には注目しておきたい。かく混亂の中で擁立された昌邑王賀にも、行動の難點から問題が生じ、やがて霍光は自己の選んだ皇帝に霍光自身が引導を渡さねばならぬ皮肉に遭遇する。『漢書』はその時の光の言葉を次の如く記す。

光謝曰、王行自絶於天、臣等驚怯、不能殺身報德。臣寧負王、不敢負社稷。（霍光傳）

かくして宣帝が即位する。そこには先の悲劇の皇太子戾太子の孫が他ならぬこの宣帝であったというもう一つの皮肉が介在したのであるが。

ところで、武帝死後から宣帝即位にかけて、かく二轉三轉する皇位繼承は、公羊學派にとって積極的に支持できるものではなかったであろう。何故ならば前章三で検討した如く『公羊傳』は王位繼承については強い原則主義に立ち、その屈折に對し強い非難を加えるからである。先例の、霍光の行爲に理論的根據を與えた郎官の言葉は、皇位繼承が能力主義に基づいて行なわれることを認するものに他ならず、この立場は、先に検討した『左傳』に見られた思考なのである。かかる意味で宣帝即位に至る皇位繼承の混亂は、公羊學派の後退と左氏學派の擡頭を生む一つの契機となったと考えられる。

第一章でふれた昭帝期に於ける公羊學者睦弘の上奏文に、『左傳』の存在が確認できるのも、かかる經緯の上に立つものと理解したい。

宣帝期の公羊學の相對化の原因は、公羊學が宣帝擁立の思想的基盤たり得なかったことの他に、宣帝個人の問題にも求められる。即ちそれは、宣帝の祖父戾太子が穀梁學の方に興味があり、そこから宣帝も穀梁學に傾いていったことであ

る。<sup>④</sup>甘露三年、公羊學と並び穀梁學も學官に樹立され、公羊學はより相對的地位に立たされたのである。次に、かくして即位した宣帝の後、西漢後半期の政治體制が『左傳』を受容する方向に向かったことを検討しよう。

## 二 皇帝權の變容

武帝の死後、霍光が昭帝を補佐する役目に就いて、漢帝國の政治機關は内朝と外朝に二分され展開する。内朝は尙書の職を勢力基盤とし、本來權力の皇帝集中を目的に形成されたのであるが、やがて皇帝から遊離して實權を奪い獨立した權力を保持し始める。宣帝期の外戚、許氏・史氏、元帝・成帝期の石顯、外戚王氏らがその例であり、外戚傳、佞幸傳、王商傳にその經緯が詳述され、多くの先學の研究がある。<sup>⑤</sup>又外朝にあつても豪族層の發展に伴い豪家出身者が官僚となる現象が生じる。<sup>⑥</sup>そしてこれら内朝・外朝勢力は共に皇帝權の抑制に向い、皇帝權は名目化、弱體化が促進されるのである。この皇帝權の弱體化は、皇帝觀の變化、皇帝と官僚の關係の變質を招き、そこに左氏學擡頭の風潮が存すると考えられるのである。

まず皇帝觀の變化とは、これまで呪術性をもち神祕的存在ととらえられていた皇帝を、現實的規範で以て規制する方向に向かったことである。元帝期、貢禹により提言された宗廟改革運動がその具體的なものとして挙げられる。運動の内容を大略すると、①天子七廟制をふまえた毀廟、不毀廟の整理、②郡國廟の廢止、に分けられ、②は永光四年、廢止される。郡國廟については、その設置の目的を元帝は、

往者天下初定、遠方未賓、因嘗所親以立宗廟、蓋建威銷萌、一民之至權也。（韋玄成傳）

と述べているが、これは板野長八氏が指摘される如く、<sup>⑦</sup>祖宗の神靈の加護により漢の權威を確立し天下の諸家を結合し、皇帝の神祕的權威を浸透させるものであった。それ故、郡國廟廢止は、神祕主義的皇帝權が後退し、皇帝を古禮で規制し始めたことを示す。このことは、同時期の帝陵徙遷の廢止によっても確認できるのである。<sup>⑧</sup>

皇帝の神權政治の後退は、皇帝權の弱體化が生み出したものであったが、武帝期に打ち出され元帝期に確固たるものとなった儒學一尊の風潮が、皇帝權を儒家の禮的規範に中らしめたことにも起因する<sup>⑤</sup>。そしてこれは、神權政治のイデオロギーとなっていた漢代公羊學の後退を意味すると考えてよいであろう。儒學一尊の風潮が、その儒學の中心的地位を占めていた漢代公羊學の呪術性への逸脱を規制し始めたのである。この公羊學の相對化に伴い春秋學の内部で左氏學が擡頭してきた。前章四で指摘した如く、『左傳』は天人相關説を説き神祕的色彩を含む漢代公羊學に對し、より現實的、人間中心の思考を保持し、そこに漢代公羊學との對置が認められたからである。そして對立は、①の宗廟整理に於いて、より具體的に、又別の方向から看取できる。

七廟制は『禮記』『穀梁傳』に明文があるが、七廟の中でこれを恒久的に残す廟（不毀廟）とするかは、明確な禮規定の缺如から平帝期に至るまで長く尾を引く。『漢書』韋玄成傳からこの經過を略述すると次の様なことである。

貢禹の上奏を基に宗廟整理が再議され、韋玄成・許嘉・尹忠・尹更始らの意見が出されたが、それらをまとめ韋玄成が大祖廟（高帝廟）、太宗廟（文帝廟）を不毀廟に、以下は身近なものから五廟をとり迭毀する旨を上奏し奏可される。この五廟とは、景帝・武帝・昭帝・宣帝の四廟と皇考廟である。皇考廟とは宣帝の父史皇孫の廟であるが、宣帝は傍系であるが爲これを五廟の中に入れることは問題となるところであった。果して尹更始らは、「皇考廟、上序於昭穆、非正禮、宜毀」と主張したのである。韋玄成の上奏で一時收拾をみた宗廟整理の問題は哀帝期に至り、武帝廟のとり扱いで再然する。武帝廟を世宗廟として不毀廟にすることは、先の元帝期に提言され認められたのであるが、彭宣・滿昌・左威らは毀廟とし、韋玄成の奏言にそって迭毀禮を定めるべく意見した。皇考廟を五廟の一つに入れるなら、孝昭・皇考・孝宣・孝元・考成のそれぞれが五廟となり武帝期は「親盡」に該當する。しかるにここで劉歆は、延々と武帝の功業を力説し、世宗廟とし不毀廟にすることを奏言した。歆は又、尹更始と同じく皇考廟を認めない。そしてその方向からも武帝廟は不毀廟となるのである。結局、歆の提案は認可される。



宗廟整理の経過は右の如きであるが、ここで尹更始・劉歆と彭宣・滿昌・左威らの對立が認められることを指摘したい。學派の上からみると、尹更始・劉歆は左氏學を學んだ者であり、彭宣らは公羊學がその基盤とする齊學系の人々なのである。この對立は、既に藤川正數氏により着目されているが、<sup>⑤</sup>今、私はこれを次の如く考えたい。左氏學派が皇考廟の設置を認めず、武帝廟を不毀廟とする主張、それは心情重視主義と原則主義に立つ『公羊傳』に對する『左傳』の現實的、合理的な思考の投影ではないだろうか。現實中心の即事思考は、宣帝の功業を認めつつそれを宣帝に限る。つまり、現實の功業は宣帝にのみ歸せられるのであり、「父爲士、子爲天子、祭以天子」（戾太子傳）の考えで設置された皇考廟を認めない。「父爲士、……」の主張は、「母以子貴」（『公羊傳』隱公元年）の思考に通ずるものであり、肉親の情を多大に評價し、それが現實的地位を凌駕するという考え方である。また武帝廟を不毀廟とすることは、武帝の功業を多大に評價することを意味し、これは王位繼承に於ける柔軟な姿勢の中で看取された『左傳』のもつ能力主義の上に立つものである。以上、皇帝權の變容を皇帝觀の變化から見たが、次にこれを皇帝と官僚の關係から検討しよう。

漢代官僚制については、西嶋定生氏により提起され、守屋美都雄・増淵龍夫氏らが加わった所謂「主客論争」を代表として、先學の多大な研究成果を得ている。そしてそこから任俠的習俗という問題が大きく脚光を浴びてきた。漢帝國を任俠的習俗という事柄で以て考えることには、未だ残された問題が數多くあるが、任俠的秩序が西漢初期の社會を大きく規定していたことは否定できない。例えば、『史記』に散見し理想的人間像として描かれた「長者」とは、任俠的氣風を保持する者であり、官僚任用の一般的基準となる「賢」なる觀念には、任俠的氣風が多分に含まれていたのである。<sup>⑥</sup>かく西漢初期に風靡した任俠的氣風は西漢初期の官僚の中に多分に看取でき、皇帝と官僚は任俠という紐帶で個人的に結合していたと解せられる。高祖集團を形成した官僚たち（蕭何・曹參・灌嬰・周亞夫）を始めとして、この結合は武帝期まで繼續していたとせねばならない。武帝に對し、直言を憚らずしばしばその怒りをつかた汲黯は、まさに任俠の士の代表であり、<sup>⑦</sup>武帝期に活躍した東方朔、司馬相如など所謂「ブレーン・トラスト」<sup>⑧</sup>となっていたグループは、任俠的氣風を多分に備

え、武帝とパーソナルな関係で結ばれていたと考えてよい。そして、漢初に『公羊傳』が春秋學に於いて第一位の地位を占めたのは、かかる時代的風潮の上に立つものといえよう。前章で繰返し述べた様に、心情重視を基とする『公羊傳』は、とりわけ、任俠的行爲の禮讀を惜しまないからである。『公羊傳』が志向した君臣關係とは、君臣の心情的結合であり、荀息・孔父らに與えた讃辭である「賢」は、漢初の官僚の理想像とされた「賢」と一致するのである。

しかるに、西漢後半期に於いては君臣關係に變化が生じたと考えられる。その原因は、一には皇帝權の變化に、一は紐帶の喪失に、一は官僚任用の方法に求めることができよう。皇帝權の變化とは、本節の始めて述べた皇帝權の名目化、弱體化である。皇帝個人と直結すべき内朝が皇帝から遊離し始めたのであり、昌邑王廢位に當つての霍光の言辭「臣寧負王、不敢負社稷」にはその端緒が窺える。紐帶の喪失とは、西漢末にかけての遊俠の氣風の衰退である。遊俠傳贊で班固は、西漢末のその衰退、墮落を述べ、傳文中に登場する任俠の士にもそれが現れている。任俠の氣風の衰退した下で、任俠精神は官僚の内面でも希薄となり、任俠という紐帶で結ばれていた結合が弛緩するのも當然であろう。任俠精神の衰退の原因は、多岐にわたり求められるが、武帝期の儒學官學化が西漢後半期にほぼ確立し、禮教主義的色彩が強くなったことがその大きな要素となっている。そしてこの儒學官學化は、官僚任用の方法に變化をもたらせたのである。

董仲舒により提言された儒學官學化は、二つの要素に分類できる。一は、儒學一尊であり、一は儒家官僚の任用である。④後者は元朔五年、公孫弘の上奏により法制化されここに選舉は射策科が設けられ、試験制度により官吏が任用されるシステムが始まる。システムは、元・成帝期にはほぼ定着し、官吏となるには學問が必要とされ、博士弟子員を経て試験による任用の方法が主流となった。⑤これが官僚と皇帝の關係に變化を與えたと考えられる。高級官僚は郎官出身者が多いが、郎官の選舉は從來、任子によって選ばれる場合が多く、⑥血縁關係に基盤を置くこの任子は、皇帝と官僚のパーソナルな關係を血縁者に轉移することにより維持し易いものであった。⑦これに對し、儒學を學び試験という合理的な方法で選出された官僚と皇帝の關係は、任俠という精神的紐帶で結ばれていた個人的なそれとは違い、より合理的、現實的な、いわ

ば、ドライな關係となつたのである。皇帝權の名目化、任俠の氣風の衰退が、共にかかる關係を志向することも十分考へ得ることである。

以上の様な西漢後半期の君臣關係の變質が、左氏學の擡頭を受容したと考えたい。前章で検討した如く、『左傳』の志向する君主關係は、まさにこの君臣の現實的、合理的な關係だったのである。本節では、左氏學の擡頭を皇帝權の變容と結びつけて考えたが、次節では吏治と關係させて検討しよう。

### 三 吏治——酷吏と循吏——

本節で取扱う吏治とは、具體的には酷吏と循吏の問題である。酷吏は西漢武帝期に活躍し、刑法志贊はその盛行を記す。しかるに宣帝期以後、吏治は變容し酷吏よりも循吏がめだつ様になる。循吏傳は、その大部分が宣帝期以後の人であり、班固はその序で、

漢世良吏、於是爲盛、稱中興焉。若趙廣漢、韓延壽、尹翁歸、嚴延年、張敞之屬、皆稱其位。然任刑罰、或抵罪誅。王成、黃霸、朱邑、龔遂、鄭弘、召信臣等所居民富、所去見思。生有榮號、死見奉祀。此廩廩庶幾德讓君子之遺風矣。

と述べる。ところで從來、峻酷なる法を適用する法術的官吏を酷吏とし、寛和と德治を主とする儒術的官吏が循吏であるとされてきた。<sup>⑧</sup>

酷吏と循吏をかく解釋することは確かに正鵠を射たものと言えるが、循吏乃至良吏が頻出したとされる宣帝期に、中興之祖と稱され、良吏を推稱した他ならぬ宣帝自身は、刑罰主義に多分に傾いたのであり、<sup>⑨</sup>良吏と稱された循吏的官吏も刑罰、法律を重視する。先の循吏傳序で班固は、「皆稱其位、然任刑罰」と述べ、成帝・哀帝期に「吏師」とされた丞相薛宣・朱傳らの言葉、

吏道以法令爲師、可問而知、及能與不與、自有賢材、何可學也。（薛宣傳）

如太守漢吏、奉三尺律令以從事耳、亡奈生所言聖人道何也。（朱傳傳）

は共にそれを物語る。然らば、酷吏から循吏の移行とかかる現象の間の齟齬は如何に解するべきであらうか。問題の解明の鍵は、やはり酷吏と循吏の性格に内在するであらう。私は、漢代の酷吏と循吏乃至良吏の性格の相違は、法適用の程度にあるのではなく、法適用の方法にあり、そこに漢代の酷吏と循吏の特性があると考ええる。以下かかる推測を具體的に述べ、そこに公羊學と左氏學の對立が介在することを指摘したい。

武帝期の代表的酷吏は張湯である。『史記』『漢書』などは、張湯を代表とする酷吏の特徴として、酷吏が「舞文巧詆」「緩深故之罪」などと恣意的に法律を適用し、「見知」「腹誹」「沮誹」などの法律を作ったことを擧げる。見知之法とは、犯罪を見て知りながら見のがした罪、沮誹とは誹謗罪、又腹誹とは、心の中で誹謗した罪である。そしてこの酷吏の法適用は、當時の儒學——春秋公羊學と密接な關係をもっていたと考えられる。『史記』酷吏列傳には酷吏と儒者との結びつきを示す記事が見え、趙翼は『廿二史劄記』で「漢時以經義斷事」と指摘する。この「經義」とは『公羊傳』の傳義——「春秋之義」であり、その基本的要素は「心を原ねて罪を定む」とする犯罪の行爲より動機を重視する主觀主義的法解釋である。このことは前章一で述べた即情評價に基づき心情重視の立場をとる『公羊傳』の理念が漢に繼承されていることを示す。

ところで、かく動機を重視する刑法の主觀主義的解釋は、行爲者の心情を判斷基準とする故、思考と實行は區別なく同一のものとする考えを生む。酷吏が適用した見知、腹誹の法はその現れであり、心情重視の公羊學を基盤としていえる。そしてこの心情重視主義は、心情という實體の無いものに依存する故、酷吏の恣意的法適用を容易にしたのである。しかし、西漢後半期には、酷吏的法適用は『漢書』の中で見られなくなった。主觀的法解釋は次第に影を潜めていったのである。次に示す記事は、端的にそれを示す。

宣帝期、穀物不足を懸念し贖罪で穀物を得ることを提案した張敞が言うに、

首匿、見知縦、所不當得爲之屬、議者或頗言其法可蠲除、今因此令贖、其便明甚。（蕭望之傳）

酷吏がしばしば重用してきた見知之法は重視されなくなったのである。重視されたのは法律の明文に即した公正なる法適用であり、又客觀主義的法解釋であつたと考えられる。右の提案が良吏と稱され、他ならぬ左氏學に關與した張敞であることは留意したいが、循吏・良吏とはまさにかかる行爲をなした者であつた。彼らは賞罰主義を基にした、刑法の公正なる適用を志向したのである。丙吉が宣帝に次期の丞相となるべき人物を推薦した言葉に、

西河太守杜延年明於法度、曉國家故事、（中略）廷尉于定國執憲詳平、天下自以不冤。（丙吉傳）  
とあり、「吏師」と稱された薛宣について、

（薛）宣爲吏賞罰明、用法平而必行、所居皆有條教可紀、多仁恕愛利。（薛宣傳）

とあるのはこの消息を傳え、ここに見られる「平」なる言葉は、循吏の特徴を表す言葉としても使用されているのである。<sup>⑧</sup>そしてこの公平さを求めることが循吏の内にも認められる法適用の嚴格さに結びつくと考えられる。酷吏から循吏の吏治の移行に於いて、法適用の嚴格性にはそれ程の變化は見られないが、その適用が主觀にとらわれず客觀的となつたと、刑法自體に於いても主觀主義的刑法から、刑法の客觀的解釋へと移行しつつあつたと想像されること、私はそこに酷吏と循吏の性格の相違を求めたい。

以上の如く酷吏から循吏の移行を解釋するのであるが、かかる移行が左氏學擡頭を準備していったと考える。前章一で述べた様に、『左傳』には法重視の考えが多分に見られ、その法とは成文法であり、その嚴格で公平なる適用を重視したのである。例〔Ⅳ〕での「越竟」という、行爲の結果で刑罰を定める解釋は、刑法の客觀主義を意味し、即事評價の上に立つ『左傳』の支持するところであつた。第一章の終りで、左氏學を學んだ者が法律に精通しているという特徴が見られることを指摘しておいたが、かかる特徴は『左傳』のもつ法重視の立場に基づくものであり、左氏學に關與した者が穀梁

學にも通じていたことも、適法性を強く主張する『穀梁傳』の性格<sup>②</sup>の上から理解できるのである。

## 結 語

本稿は、宣帝期以後、劉歆による『左傳』の學官樹立の提言に至る西漢後半期に於いて、春秋學の内部で公羊學が相對化し、左氏學が擡頭してきたことを西漢後半期の政治史と結びつけて考えたものである。

西漢期にあつては、武帝期を境にして政治體制に大きな變化が生じる。そして武帝期はいわば西漢初期體制の極盛期であり、同時に以後の變貌の要因は武帝期に胚胎したのである。儒學の官學化はその要因の一である。繼承の斷絶を以て成立した宣帝、そして元帝・成帝と續く西漢後期體制は、皇帝權の性格、君臣關係、吏治の各面でそれ以前とは相違が見られる。かかる政治史の變化が左氏學の擡頭を準備したと考えられる。即ち、初期體制を支えるイデオロギーとなっていた公羊學が體制の變化と共にその絶對的地位が低落し相對化したのであり、そこに左氏學の擡頭を生み出した。『春秋左氏傳』の思想性は西漢後期體制の性格に適合していたのである。かく政治上にその擡頭の原因が求められる『左傳』は、西漢最末期、劉歆の學官樹立の提言という形で歴史の表面に登場する。つまり提言は、それ以前より内在せる左氏學と公羊學の對立と展開の一つの歸結點であつた。そしてこれは、以後體系となり對立する今文・古文論争の幕あけでもある。かかる意味に於いて本稿は、「今文古文論争序説」と言つてもよい。

## 註

① 狩野直喜「兩漢文學考」(『兩漢學術考』筑摩書房、一九六四)、鎌田正「左傳の表章と左氏學の展開に關する研究」(『左

傳の成立と其の展開』大修館書店、一九六三)。

② 内野熊一郎『今文古文源流型の研究』(東京教育大學内野博士著書刊行會、一九五四)。

③ 以下本稿は『左傳』を取り扱っていくが、周知の如く『左

傳』は從來、その史料性が問題視されてきた。即ちそれは劉逢祿、康有爲、飯島忠夫、津田左右吉氏らによる劉歆偽作説であるが、鎌田正氏は『左傳の成立と其の展開』でこれら一連の偽作説を個別に取り上げ精緻なる反證を施した。氏のこの勞作

は、長年に亙る論争に終止符をうつものであり、私は、左傳僞作説には鎌田氏と同様、多分に懷疑的である。また劉歆による左傳表章の突然さがその僞作説を生んだとするなら、本稿の行論の中でその誤りが明らかにされるであろう。

④ 『漢書』楚元王傳は、この間の経緯を

及歆親近、欲建立左氏春秋及毛詩、逸禮、古文尙書皆列於學官。哀帝令歆與五經博士講論其義、諸博士或不肯置對、歆因移書太常博士、責讓之曰、……と記す。

⑤ 劉歆がこの書を提出した結果として

其言甚切、諸儒皆怨恨。是時名儒光祿大夫龔勝以歆移書上疏深自罪責、願乞骸骨罷。及儒者師丹爲大司空、亦大怒、奏歆改亂舊章、非毀先帝所立。（楚元王傳）

とあり、歆自身に於いても、

歆由是忤執政大臣、爲衆儒所訕、懼誅、求出補吏、爲河內太守。（楚元王傳）

と中央から離れたのである。

⑥ 『史記』張丞相列傳

張丞相蒼者、陽武人也。好書律曆、秦時爲御史、主柱下方書。（中略）是時蕭何爲相國而張蒼乃自秦時爲柱下史、明習天下圖書計籍。蒼又善用算律曆、故令蒼以列侯居相府、領主郡國上計者。

⑦ 『說文解字』序

魯恭王懷孔子宅、而得禮記尙書春秋論語孝經、又北平侯張蒼獻春秋左氏傳。

⑧ 『後漢書』賈逵傳

五經家皆無以證圖讖明劉氏爲堯後者、而左氏獨有明文。

⑨ 狩野直禎「霍光から王莽へ（一）前漢末政治史の一断面」

『聖心女子大學論集』三〇、一九六七、四四—四六頁。

⑩ 齊召南は

案以漢爲堯後、始見此文。然則弘雖習公羊亦兼通左氏矣。

（『漢書補注』王先謙所引）

とし、狩野直禎、河地重造氏は古文學派の擡頭をそこに認める。狩野氏前掲論文。河地重造「王莽政權の出現」（『岩波講座』

『世界歴史』四、一九七三）。

⑪ 『左傳』宣公十五年

宋人使樂嬰齊告急于晉、晉侯欲救之。伯宗曰、不可、古人有言曰、雖鞭之長、不及馬腹。天方授楚、未可與爭。雖晉之彊、能違天乎。諺曰高下在心、川澤納汙、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含詬、天之道也。

⑫ 劉師培『左龔集』卷二「左氏學行於西漢攷」。

⑬ 『漢書』儒林傳

召五經名儒太子太傅蕭望之等大議殿中、平公羊、穀梁同異、各以經處是非。（中略）望之等十一人各以經誼對、多從穀梁。由是穀梁之學大盛。

⑭ 『穀梁傳』定公十年の條。

⑮ 『穀梁傳』僖公九年

天子之宰、通于四海。

⑯ この場合、『公羊傳』は明白なものであるから單に「傳曰」と述べられたとの解釋もあらうが私はそうは考えない。『漢書』

中、上奏文の文中に見られる「傳曰」「傳不云乎」は二十八例ある。その内分けは、『論語』十一例、『尚書大傳』四例、『荀子』二例、『呂覽』『禮記』『易傳』『孝經』『儀禮』(この場合、子夏傳の文で、子夏傳そのものが「傳曰」の體裁を取っている)ので舉例に不適かも知れない)各一例、不明五例となる。これより西漢期に使われた「傳曰」とは、『論語』を筆頭とする所謂諸子の書の中の言葉を示す場合が最も多いことがわかる。勿論、『禮記』『易傳』等、「經」に對する「傳」の意味で使用される場合もあるが、『春秋』に限っていえば、『公羊傳』が「傳曰」として引用された例は唯一この梅福傳のみであり、普通、「春秋」「春秋之義」として引用され「經」と同等の扱いを受けていたと思える。又、上奏文中に見える、

春秋經曰、宋殺其大夫。

なる僖公二十五年の經文については、『公羊傳』も傳を立てて解釋しているが、梅福はこれよりも『穀梁傳』に従ったのであり、彼に於ける『公羊傳』の輕視が認められよう。

- ⑮ 本稿は、『公羊傳』と『左傳』の對峙を中心に考えた爲、『穀梁傳』については深く言及せず、公羊學の地位の低下を示すものとしてのみ掲げた。西漢の穀梁學の地位については稿を改めて論じたい。

- ⑯ 劉師培前掲書。

- ⑰ 山田琢「春秋三傳の比較研究(一)」(『金澤大學法文學論集』哲學史篇九、一九六二)、同「春秋三傳の比較研究(二)」(『金澤大學教養部論集』人文科學篇五、一九六八)

- ⑱ 『公羊傳』僖公二十二年 何休注

- 所以起有君而無臣、惜其有王德、而無王佐也。若襄公所行、帝王之兵也。有帝王之君、宜有帝王之臣。有帝王之臣、宜有帝王之民。未能解辭而守其禮、所以敗也。
- ⑲ 司馬子魚は、僖公十九年(二十二年)にかけてしばしば登場し、『左傳』の作者は司馬子魚に高い評價を與えている。

- ⑳ 『公羊傳』襄公三十年

宋災故者何。諸侯曾于澶淵、凡爲宋災故也。曾未有言其所爲者、此言所爲何、錄伯姬也。諸侯相聚、而更宋之所喪、曰死者不可復生、爾財復矣。

- ㉑ 「義事」について杜預注は、「義、從宜也」と解し、孔穎達疏は「義者宜也。從宜、宜辟火也」とする。『左氏會箋』はこれらを總合し、「義ニテ事ヲスル」と讀み下し次の様に解釋している。

杜云從宜、卽義宜也之意。言婦當度事之宜而行、不必待人也。

- いまこの說に従い、「義事」Ⅱ「事の宜よろしきをはかりて行う」と解釋する。

- ㉒ 日原利國「春秋公羊傳の研究」(創文社、一九七六)「二、俠氣と復讐」、『公羊傳』の思想について、日原氏の右の書に多大の恩恵を蒙った。

- ㉓ 日原氏前掲書「三、心情の偏重」

- ㉔ 『公羊傳』の復讐肯定論については、日原氏前掲書「二、俠氣と復讐」に詳しい。

- ㉕ この條に於ける孔穎達疏に  
軍法、以殺敵爲上。將軍臨戰必三令五甲之。狂狡失期戒之



禮、違元帥之命、曲法以拯鄭人、宜其爲禽也。

28 板野長八「左傳の作成」(『史學研究』一二七、一九七五)。

29 小倉芳彦『中國古代政治思想研究』(青木書店、一九七〇)。

例えは

仲尼聞是語也曰、以是觀之、人謂子產不仁、吾不信也。

(襄公三十一年)

仲尼曰、子產於是行也、足以爲國基矣。詩曰、樂旨君子、

邦家之基。子產君子之求樂者也。(昭公十三年)

31 子產が臨終の際、子大叔に残した言葉として、次の様なものがある。

我死、子必爲政。唯有德者、能以寬服民、其次莫如猛、夫火烈、民望而畏之、故鮮死焉。水懦弱、民狎而斲之、則多死焉、故寬難。(『左傳』昭公二十年)

徳治主義よりも刑罰主義に傾いたものとして理解できよう。

32 『左傳』定公九年 杜預注、

鄧析鄭大夫。欲改鄭所鑄舊制、不受君命、而私造刑法、書之於竹簡、故云竹刑。

これを受けて『左氏會箋』は、

杜云欲改舊制不受君命、其意似爲罰其私造殺之。

と解釋している。

33 孔穎達疏

下云棄其邪可也。則鄧析不當私作刑書而殺。蓋別有當死之罪、駟敵不矜免之耳。

34 例えは、

見有禮於其君者、事之如孝子之養父母也。見無禮於其君

者、誅之如鷹鷂之逐鳥雀也。(文公十八年)

視民如之、見不仁者誅之、如鷹鷂之逐鳥雀也。(襄公二十五年)

35 『公羊傳』に於ける家族間の愛情と法的權威の關係については、日原氏前掲書「四、人倫道德」に詳しく論じられている。

董仲舒については、『通典』卷六九に彼の『春秋治獄』殘簡が見える。

甲無子、拾道旁棄兒乙、養之以爲子。及乙長、有罪殺人。

以狀語甲、甲藏匿乙、甲當何論。仲舒斷曰、甲無子、振活

養乙、雖非所生、誰與易之。詩云、螟蛉有子、蜾蠃負之。

春秋之義、父爲子隱、甲宜匿之。

この場合も、家族間の愛情の優先を主張するものである。

36 例〔Ⅶ〕以外にも次の様な話がある。

晉侯の弟揚干は曲梁で失態を演じた。揚干の御者を罰した魏絳の行爲に晉侯は初め激怒するが、魏絳の言明を聞き、言うに

寡人之言、親愛也。吾子之計、軍禮也。寡人有弟、弗能教訓、使干大命、寡人之過也。

として、『能以刑佐民』と禮讃する。(襄公三年)

この話も、刑法適用が親愛の情にまさることを示す。

37 日原氏前掲書 「七、文と實」。

38 隱公に關する『公羊傳』の筆法については、日原氏前掲書「三、心情の偏重」に詳しい。

39 「何賢乎某讓國也」の表現は『公羊傳』中、四例見られる。

第一は、僖公二十八年の條に見られる衛叔武である。晉文公は

衛侯を廢して弟叔武を立てんとする。拒絶すると後に衛侯が歸國できないと懸念した叔武は、いったん受諾し、後に衛公に讓位した。

第二は、襄公二十九年條の吳季札である。吳には謁・餘祭・夷昧・季札の同母兄弟があり、兄三人は季札に位を繼がせんとした。季札は國外にいて、長庶の僚が位に即くが闔廬（謁の子）は僚を殺し季札をむかえる。しかし札は闔廬に讓國し國外に去る。

第三は、昭公二年條の喜時である。軍中で死んだ曹伯の後には、弟喜時が庶兄負芻かが問題となるが、喜時は讓位した。

第四は、昭公三十一年條、邾婁叔術である。邾婁の王宮で不始末を犯した邾婁顔は誅され弟叔術が即位する。しかし後、叔術は顔の子夏父が成人するのを待ち讓位した。

④③ 『公羊傳』隱公三年、「莊公馮弑與夷」の何休注に「馮與督共弑獨公」とある。

④④ この部分、杜預注は「不以罪誅、故得立後世其祿」とある。

④⑤ 例えば『左傳』隱公四年の語、

衛州吁は桓公を殺し自立したのであるが、石碯は我が子厚を犠牲にし州吁を殺し、桓公の子晉を立てる。

『左傳』はこの石碯の行爲を、

君子曰石碯純臣也。惡州吁而厚與焉。大義滅親、其是之謂乎。

と讚美し、經文「衛人立晉」は衆意によるものとし、その即位を肯定する方向にある。ところが、『公羊傳』のこの部分は、晉者何。公子晉也。立者何。立者不宜立也。其稱人何。衆

立之之辭也。然則孰立之。石碯立之。石碯立之則其稱人何。衆之所欲立也、衆雖欲立之、其立之非也。と『左傳』とは、全く意見を異にする。

④⑥ 例えば、『左傳』昭公七年には次の様な話が見える。

衛襄公の夫人には子が無かったが嫡子孟縶があり、後に弟元が生まれた。足が不自由な孟縶よりも元に位を繼がせようとする。易で占をたてた臣下の言うに、

弱足者居、侯主社稷、臨祭祀、奉民人、事鬼神、從會朝、又焉得居。各以所利、不亦可乎。

「各々は能力に應じたことをすればよい」とする能力主義に立つこの言葉は、『左傳』に見える王位繼承に對する柔軟な姿勢を示すものであらう。

④⑦ 『左傳』が君臣の心情的結合に冷淡であることは、その殉死否定の態度でも確認できる。『左傳』文公六年に次の様な話がある。

秦穆公の死に際し、子卑氏の三子、奄息、仲行らを殉死さす。これを論評するに、

君子曰、秦穆之不爲盟主也、宜哉。死而弃民。先王違世、猶貽之法、而況奪之善人乎。（中略）今縱無法以遺後嗣、而又收其良以死、難以在上矣。

君臣の心情的結合の窮極的表れである殉死を『左傳』は認めないのである。

一方、君と臣の心情的結合を重視する『公羊傳』は、君と國家の心情的結合も要求する。國が滅びる時、君は國家に殉ずべきであるとし、「國滅君死之、正也」（『公羊傳』襄公六年）と

述べる。これに對し『左傳』にはかかる考えはないとの解釋がある。許慎『五經異義』には、

公羊說國滅君死之正也。故禮運云、君死社稷、無去國之義。左傳說昔大王居邕、狄人攻之、乃踰梁山、邑於岐人。故知有去國之義。（『禮記』曲禮下、正義所收）

と、左氏說には去國之義があると解釋するのは、『左傳』が内包する合理的思考から導き出された説であろう。

④5 日原氏 前掲書「六、特異な夷狄論」。

④6 重澤俊郎『周漢思想研究』（弘文堂、一九四三）所收。

④7 板野長八『中國古代における人間觀の展開』（岩波書店、一九六三）三八八頁。

④8 原文「子產弗與」の杜預注に、「以爲天災流行、非禍所息故也」とあり、今これに従って解釋した。

④9 『漢書』儒林傳

宣帝即位、聞衛太子好穀梁春秋、以問丞相韋賢、長信少府夏侯勝及侍中樂陵侯史高、皆魯人也。言穀梁子本魯學、公羊氏乃齊學也。宜與穀梁。

⑤0 鎌田重雄「漢代の尙書官——領尙書事と錄尙書事を中心として——」（『東洋史研究』二六—四、一九六八）、増淵龍夫「漢代における國家秩序の構造と官僚」（『中國古代の社會と國家』弘文堂、一九六〇）、河地重造「王莽政權の出現」（岩波講座『世界歴史』四、一九七〇）。

⑤1 好並隆司「前漢後半期における皇帝支配と官僚層の動向」（『東洋史研究』二六—四、一九六八）。

⑤2 好並氏前掲論文、河地氏前掲論文。

⑤3 『漢書』韋玄成傳

至元帝時、貢禹奏言、古者天子七廟、今孝惠、孝景廟皆親盡、宜毀。及郡國廟、不應古禮、宜正定。

⑤4 板野長八「前漢末に於ける宗廟・郊祀の改革運動」（『中國古代における人間觀の展開』前掲）。

⑤5 好並隆司「西漢皇帝支配の性格と變遷」（『歴史學研究』二八四、一九六四）。

⑤6 板野氏は、この禮的規範とは直接的には、『孝經』『禮記』の精神に基づくものとされる。（板野氏前掲論文、五五〇—五五一頁）

⑤7 『禮記』王制、『穀梁傳』僖公十五年の條。

⑤8 藤川正敷「前漢時代における宗廟禮說とその思想的根底」（『東方學』二八、一九六四）。ただし、今文・古文の思想性についての氏の解釋には聊か疑問が残る。

⑤9 上田早苗「漢初における長者——『史記』にあらわれた理想的人間像——」（『史林』五五—三、一九七二）。

⑥0 江村治樹『「賢」の觀念より見たる西漢官僚の一性格』（『東洋史研究』三四—二、一九七五）。

⑥1 汲黯に對し武帝は腹を立てつつも好意的で、「古有社稷之臣、至如黯、近之矣」「吾久不聞汲黯之言、今又復妄發矣」など汲黯を評した言葉は、武帝と汲黯が任侠という紐帶で個人的に結合していたことを示す。

⑥2 吉川幸次郎「漢の武帝」（『吉川幸次郎全集』六、筑摩書房、一九六八）。

⑥3 『漢書』游侠傳には次の様な話が見える。

哀帝期、谷口令原涉は季父を殺される。そこで彼は職を辭し、殺害者への復讐を誓う。復讐がとげられた後、原涉の氣概にほれた游侠の徒が集まり、涉は身をつくして彼らをもてなす。或る人がその様な原涉を非難すると、涉それに對えて曰く、「子獨不見家人寡婦邪。始白約救之時、意乃慕宋伯姬及陳孝婦、不幸壹爲盜賊所汙、遂行淫失。知其非禮、然不能自還、吾猶此矣。」

原涉のこの言葉からは、あの「自尊」をモットーとした任侠の氣風は感じられない。

- ⑤4 儒學一尊は『漢書』董仲舒傳に見える董仲舒第三對策で、儒家官僚任用は同第二對策で提言されている。

- ⑤5 元帝・成帝期以後、丞相となつた者は十二名いるが、内十名は儒家官僚であり、そのうち四名が射策甲科出身者である。また成帝期の丞相である翟方進が小史であつた時、汝南の蔡父に言われた言葉として、

小史有封侯骨、當以經術進、努力爲諸生學問。(翟方進傳)とあるが、これらは儒學が高官となる爲の必要條件であり、その主流が射策科であつたことを示す。

- ⑤6 漢代の官僚任用については、永田英正「漢代の選舉と官僚階級」(『東方學報』京都四一、一九七〇)、嚴耕望「秦漢郎吏制度考」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』二三上、一九五一)に詳しい。

- ⑤7 先例の任侠の士汲黯も「至黯七世、世爲卿大夫、黯以父任」(『史記』汲黯列傳)とある如く、代々續いて高級官僚となつてきた家系出身である。

- ⑤8 鎌田重雄「循吏と酷吏」(『秦漢政治制度の研究』日本學術振興會、一九六二)。

- ⑤9 例えば宣帝と子元帝の會話、

陛下持刑太深、宜用儒生。宣帝作色曰、漢家自有制度、本以霸王道雜之。奈何純任德、教用周政乎。且俗儒不達時宜、好是古非今、使人眩於名實、不知所守、何足委任。

(元帝紀)

や、蓋寛饒傳の

是時上方用刑法、信任中尚書宦官、寛饒奏封事曰、方今聖道寢廢、儒術不行、以刑餘爲周召、以法律爲詩書。

などの記述はそれを物語る。

- ⑦0 自公孫弘以春秋之義繩臣下取漢相、張湯用峻文決理爲廷尉。於是見知之法生、而廢格沮誹窮治之獄用矣。(『史記』平準書)

(張)湯奏、當異九卿見令不便、不入言而腹誹、論死。自是之後、有腹誹之法以此。(同、平準書)

所治即豪、必舞文巧詆、即下戶羸弱、時口言、雖文致法、上財察。(『史記』酷吏列傳)

於是招進張湯趙禹之屬、條定法令、作見知故縱、監臨部主之法、緩深故之罪、急縱出之誅。(『漢書』刑法志)

故懼急之臣進、而見知廢格之法起、杜周咸宣之屬以峻文決理貴。(『鹽鐵論』刺腹)

- ⑦1 『史記』酷吏列傳

是時上方鄉文學、湯決大獄、欲傳古義、乃講博士弟子治尚書春秋、補廷尉史、亭疑法。(中略)刻深吏多爲爪牙用

者、依於文學之士、丞相弘數稱其美。

⑦② 春秋之義、原心定罪。(薛宣傳)

春秋之聽獄也、必本其事而原其心。(《春秋繁露》精華)

⑦③ 日原利國「漢代刑罰における主觀主義——『春秋』と刑罰との關係——」(『愛知學藝大學研究報告』十一、一九六二)。同「春秋公羊學の倫理思想——判斷方式について——」(『東洋史研究』二三—三、一九六四)。

⑦④ 例えは循吏傳に於ける朱邑について、「廉平不苟、以愛利爲行」とある。

⑦⑤ 狩野直禎氏前掲論文三八頁。日原氏前掲書一四二頁。

⑦⑥ 左氏學に關與した者は賞罰主義、法律の客觀的解釋という循吏的吏治を施行したと考えられるが、これは左氏學派の一人翟方進の場合に明確な形で表れる。成帝期の丞相で文法吏事に通じ、「通明相」と稱せられた彼は、嚴格なる法適用で對立者を斥けていく。翟方進傳は彼の業績を

持法刻深、舉奏收守九卿、峻文深詆、中傷者尤多。(中略)而方進持立後起、十餘年間至宰相、據法以彈威等、皆罷退之。

と述べる。ここに「據法以彈威等」と記されている陳威の彈劾

に當つての翟方進の上奏文中に

昔季孫行父有言曰、見善於君者愛之、若孝子之養父母也。

見不善者誅之。若鷹鷂之逐鳥爵也。(翟方進傳)

なる賞罰主義を示す言葉が見えるが、これは他ならぬ『左傳』文公十八年・襄公二十五年の言葉であり、『左傳』のもつかかる思考が翟方進の政治方針に端的に表れているのを物語る。また翟方進の取った判決例として孔光傳に次の様な話が見える。

成帝期、淳于長は大逆の罪で誅せられた。罪の發覺以前に離婚させられていた妻に連坐制を適用するか否かの問題が生じる。翟方進は、法令の規定を盾に言う。

令、犯法者各以法時律令論、明有所訖也。長犯大逆時、廼始等見爲長妻、已有當坐之罪、與身犯法無異。後乃棄去、於法無以解。

これに對し、孔光は反對意見を述べる。

大逆無道、父母妻子同產無少長皆棄市、欲懲後犯法者也。夫婦之道、有義則合、無義則離。(中略)義已絕、而欲以爲長妻論殺之、名不正、不當坐。

あくまで法令の規定にそつて裁斷しようとする翟方進と、「義」を中心に主張する孔光の對立は、法解釋に於ける客觀主義的解釋と主觀主義的解釋の對峙に繋がるものであらう。

**Politics and *Ch'un-ch'iu* Studies 春秋學 in the Latter Half  
of the Western Han 西漢**

—the opposition and development between the *Tso-shih ch'un-ch'iu*  
左氏春秋 and the *Kung-yang ch'un-ch'iu* 公羊春秋—

*Itaru Tomiya*

This essay will investigate the transformation of *Ch'un-ch'iu* studies in the latter part of the Western Han dynasty, from the reign of Hsüan-ti 宣帝 through that of Ai-ti 哀帝, from the perspective of political history; and it will attempt to look at the later debate between *chin-wen* 今文 and *ku-wen* 古文. If we divide the Western Han at the reign of Wu-ti 武帝, we can see contrasts in the areas of the nature of imperial power, the relationship between the sovereign and his ministers, and the exercise of officials' powers. These changes caused a decline in the position of and broke the influential hold of *Kung-yang* studies which had become the ideology supporting the political structure of the early Western Han, and generated the rise of *Tso-chuan* 左傳 studies. The philosophical nature of the *Tso-chuan* accorded with the later Western Han's political system. The proposal for the official establishment of *Tso-chuan* studies by Liu Hsin who brought *Tso-chuan* studies into the forefront of history was one end result of the opposition and development between *Tso-chuan* and *Kung-yang* studies which had been latent since the earlier Western Han; and it was simultaneously the beginning of the debate between *chin-wen* and *ku-wen* which would rage in the Eastern Han.